

## 【報 告】

# タイ(チェンマイ)・スタディツアー報告

鈴木ゼミナール・加藤ゼミナール  
(文責：鈴木佑記)

## 目 次

1. スタディツアー実施の趣旨と期待される成果
2. チェンマイに関する情報
3. 山地民に関する情報
4. スタディツアー実施概要
5. 学生による「振り返り(気づき)」まとめ

## 1. スタディツアー実施の趣旨と期待される成果

近年、少数民族や先住民族の権利を見直す動きが国を超えて活発になってきている。2007年に「先住民族の権利に関する国連宣言」が採択されたことから明らかなように、マイノリティ社会が主流社会とは異なる独自の文化や社会を維持することが尊重されるようになった。そのようなグローバルな動きがあるのに対して、他国と比して多民族国家ではない日本に暮らす学生は、少数民族や先住民族に対する関心が薄いように思われる。また、海外のマイノリティをめぐる状況を知る機会は少ない。そこで、以下二つの目的を持つ、本スタディツアーを実施する。

第一目的は、本学学生がチェンマイを訪問することでタイの少数民族についての理解を深めることにある。第二目的は、本学学生がチェンマイ大学の学生と交流をすすめることで、学術交流を深めることにある。

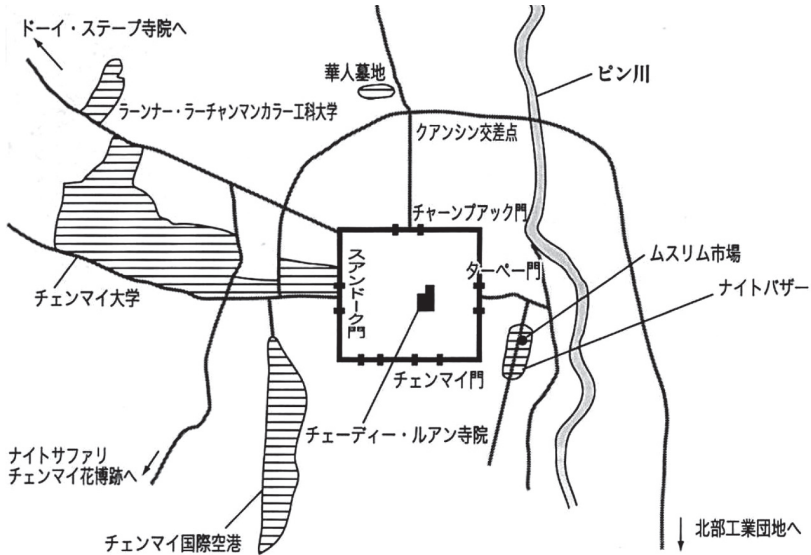
より具体的には、チェンマイ近郊に暮らす少数民族(カレン、モン、アカ等の山地民)の施設(山岳民族博物館および民族観光村落)を訪問し、タイの少

数民族が直面する問題群について学ぶ。また、チェンマイ大学で本学学生が日本の文化(若者言葉, ファッション)に関する発表を行う。その後両大学学生混交のグループ討論を実施する。

本スタディツアーでは、「実地教育」が最重要ポイントとなる。国土館大学においても机上で学べる海外の出来事は多々ある。その一方で、現地に実際に赴き、その土地に暮らす人々と対面的な交流をすることでのみ得られることもあるはずである。たとえば、外国の同世代の学生と交流することで、本学学生の語学勉強の意欲やグローバル意識は高められるはずである。そのほか、私たちが普段何気なく接している日本の文化は、海外の文化との比較においてはじめて理解可能なこともあると考える。

本スタディツアーでは、タイ王国チェンマイという東南アジアの地方都市へ訪れることで、本学学生の海外への関心を惹起するだけでなく、日本国内にある身近な異文化についての知識を深めるきっかけになることが期待される。具体的には、チェンマイ近郊で暮らす少数民族の生活に触れることで、身近に暮らす日本のマイノリティ(単に少数民族だけでなくLGBTなどの社会的弱者)についての関心を深めることを目指す。さらには、国土館大学とチェンマイ大学の学生同士の交流を通じて、国土館大学が海外協定校の一つでもあるチェンマイ大学との大学間交流を今まで以上に深められることが強く期待される。なお本スタディツアーは、国土館大学国際大学交流セミナーの支援制度を利用して実施したことを明記し、ここに謝意を示す。

## 2. チェンマイに関する情報



出典：綾部真雄編，2014『第2版 タイを知るための72章』明石書店，337頁。

チェンマイ県は、タイの首都バンコクの北方693キロメートルに位置する、人口、面積ともに北部最大の県である。タイ第2の都市といわれるが、人口は約164万人（2017年）であり（77都県中第5位）、バンコク都の人口約568万人（2017年）に遠く及ばない。

「新しい城壁都市」を意味するチェンマイは、1296年、ピン川沿いにマンラーイ王が建設したことに始まる。彼はチェンマイを拠点として版図を広げてラーナー王国（1292年～1775年）を築いた。1558年にビルマ（現ミャンマー）に敗北後は約200年間（1796年まで）、チェンマイ地域はビルマ勢力の支配下に置かれた。現タイ王朝（ラッタナーコーシン王朝）に完全に統合されたのは、1894年のことである。

上記地図上で城壁（黒線）に囲まれた部分が旧市街地である。その中央東寄

りに朽ちかけた大仏塔を擁するチェーディー・ルアン寺院があり、この境内に置かれたラック・ムアン（国柱）がチェンマイの象徴的中心にあたる。城壁とピン川の一帯がチェンマイきっての観光エリアである。我われの宿泊先も同エリアのナイトバザール地区南方に位置する。

### 参考文献：

遠藤元, 2009「チェンマイ」日本タイ学会編『タイ事典』めこん, 244-245 頁。

綾部真雄, 2014「チェンマイ」綾部真雄編『第2版 タイを知るための72章』明石書店, 336-340 頁。

### 3. 山地民に関する情報

タイ北部（上部）には、山地民（チャオ・カオ）と呼ばれる少数民族が多数住んでいる。彼らの多くは18世紀以降にタイの領域に移住してきた比較的新しい民族であり、主に山の中腹や尾根など標高の高いところを住処としてきた。タイ政府が認定しているのは、カレン（約44万）、モン（約15万4千）、ラフ（約10万3千）、アカ（約7万）、ミエン（約4万5千）、リス（約3万8千）、ティン（約4万3千）、ルア（約2万2千）、カム（約1万）、ムラブリ（約3百）の10民族である（2002年に社会・開発福祉局がとった最新の統計、現在は変動が大きいと考えられる）。いずれの民族もタイだけに存在するわけではなく、国境を跨いで周辺国にも多数暮らす（例えば、カレンはミャンマー側に約300万いる）。

実際には、これら10民族の他にもカチンやパロンといった山地に暮らす非タイ系の少数民族が多くいるが、タイ政府はそうした人々を「山地民」とは呼ばない。彼らが比較的近年になってからタイに定着した、入管手続きを経ない不法移民およびその子孫であることが理由である。

今回のスタディツアーでは主に、カレン、モン、アカの人々と接触する機会があった。以下、簡単に各民族について紹介する。

**カレン**

チベット・ビルマ族に属し、カレン語系言語を母語とする。タイ族に先んじ北部から西部に分布したとされ、17世紀にはランナー・タイの年代記に登場する。主たる下位言語集団にスゴー・カレン、ポー・カレン、ブウェ・カレン、トンスー・カレンなどがいる。いわゆる「首長族」という蔑称で知られる観光資源として利用される人々は、パドゥン・カレン（あるいはカヤン）と呼ばれる。伝統的に精霊崇拝を行ってきたが、上座仏教を受容したグループやキリスト教化したグループも存在する。

**モン**

モン・ミエン諸語に属する。タイでは、白モンと青（緑）蒙の二つの自称集団に大別される。ここ200年ほどの間の中国西南部からの移住者で、東南アジアではベトナム、ラオス、タイ、ミャンマーに分布する。移動焼畑耕作が主たる生業であり、ケシ栽培の主役とみなされてきたが、定着居住がすすむにつれ、常畑での換金作物の栽培に転換している。刺繍が有名。

**アカ**

チベット・ビルマ語派ロロ語群に属する。ミャンマーから移住してきたといわれる。焼畑による農耕が主要な生業だったが、近年はコーヒーやトマトなどの商品作物の栽培が増加している。銀細工が有名。山地民のなかでは、土産物行商を最も盛んに行う。

**参考文献：**

- 綾部真雄，2014「タイ山地民の現在：先住民としての自己定義」綾部真雄編『第2版 タイを知るための72章』明石書店，230-234頁。  
日本タイ学会編，2009『タイ事典』めこん。

#### 4. スタディツアー実施概要

2018年8月7日（火）から12日（日）にかけて6日間、タイ王国にあるチェンマイを訪問し、スタディツアーを実施した。メインイベントである、国士舘大学との海外提携工であるチェンマイ大学で学術交流を行ったのは8月9日である。各日に実施した活動内容の詳細は下記の通りである。

8月7日は羽田空港からバンコク経由にてチェンマイに移動した。ホテル到着後、夕食時に参加メンバーと本セミナーの目的と内容について確認した。

8月8日は山岳民族博物館と山岳民族観光村落（Baan Tong Luang Eco-Agricultural Village）に訪問し、主にカレン、モン、アカについての情報を収集した。またホテルに戻った後は、翌日にチェンマイ大学で行う本学学生による口頭発表の準備を行った。本セミナーの目的の一つである、海外のマイノリティについて学ぶうえで、山岳民族博物館に展示している資料で基礎知識を身につけ、実際に山地民が暮らす村落を訪れたことは、参加学生にとって日本の生活を見直すきっかけとなったことが、その日の夜行った振り返り作業で明らかとなった。



写真1 チェンマイ大学における国士舘大学学生による口頭発表の様子

8月9日はチェンマイ大学日本研究センターへ伺い、チェンマイ大学人文学部に所属する学生たちとの学術交流を実施した【写真1, 2】。自己紹介後、国士舘大学学生は、日本の若者言葉とファッション文化に関するプレゼンテーションを行った。その後、チェンマイ大学の学食へ移動し、学生同士の交流を深めた。大学間の学術交流のあとは、ドーイステープ山麓の奥深くにあるモン族の村落へ訪問した。かつてモン族はケシ栽培する違法者として有名であったが、現在はコーヒーやイチゴなどの換金作物を育てて生活している実態について学んだ。

8月10日はチェンマイ旧市街地を探索し、13世紀にチェンマイを拠点として繁栄したラーンナー王国の歴史について学んだ。教員が事前に提示した課題について、学生は協力しながら解決に向けて取り組んだ。たとえば、ジャウィーとタイ語で呼ばれる土地神を探し出し、そこに供えられているものには何があるのか調べたり、中国からの影響を受けたと考えられる事物にどのようなものがあるのかメモしたりするなどした。



写真2 チェンマイ大学学生との記念写真

8月11日はチェンマイ旧市街地の周辺にある市場を中心に探索し、少数民族や観光客が行き交う多民族都市の状況を見てまわった。探索中には、タイ人に話しかけて、現地の情報を引き出すという課題が出され、学生は積極的に取り組んだ。

8月12日はチェンマイからバンコクを経由して日本に帰国した。

本出張の最大の成果は、国士舘大学の海外協定校であるチェンマイ大学との学術交流を、両大学の学生を通して深めることができた点にある。また、チェンマイ近郊に暮らす少数民族について、現在彼らが直面する大きな問題の一つが観光開発にあることを学んだ点も成果であった。

## 5. 学生による「振り返り(気づき)」まとめ

本スタディツアーではチェンマイでの滞在期間中、毎晩その日の活動内容を振り返る作業を実施した。単にその日に起きた出来事を回想するだけでなく、学生それぞれが考えたこと、感じたこと、反省点などを共有することで、次の日の活動に活かせるような思考の掘り下げを行った。ここでは、日々の振り返り作業にあたって記録したシート内容は省略する。その代わり、全行程を終えてから学生が提出した、設問付き振り返りシートの内容を一部紹介することにしたい。そうすることで、参加学生が本スタディツアーでどのような経験をしたのか、またどのように感じたのかが生き活きと伝わるはずである。基本的には、学生による文面を掲載しているが、そのままでは意味不明な場合や内容が伝わりにくいなどの場合に限り、若干の加筆修正を行ったことを断っておく。

\*\*\*\*\*

### 設問1

スタディツアー期間中の印象深い出来事を三つ挙げてください。何が起こりましたか？それに対して自分はそれにどのように反応しましたか？他の人たちはどのように反応していましたか(していたように見えますか)？もう一



度同じような事が起きたら、どのような行動を取りたいですか？

中川翔太

#### 1-1 日本人以外とのコミュニケーション

・英語，タイ語，ジェスチャーを使ってコミュニケーションをとって通じたこと。タイ語に関しては発音が難しく，抑揚を変えながら試行錯誤し，正確な発音を模索した。

#### 1-2 食について

・カオソーイやトムヤムクン等のタイ料理を食べた。日本で食べるタイ料理とは味付けが違うが，美味しく食べられた。ただしドリアンは臭いがきつく，口に合わなかった。

#### 1-3 市街地探索

・不慣れた土地を自らの力で探索し，課題を解決していく楽しさに興奮を覚えた。

鈴木友香

#### 2-1 現地のタイ人や観光客のアメリカ人や中国人とコミュニケーションをとったこと

・ミッションクリアのためにタイ人に話しかけたり，ソントウで相乗りした人と話したりした。現地の人は話しかけたらニコニコしてくれて話に耳を傾けて，言葉を理解しようとしてくれた。優しい国だと印象に残った。他の観光客も自分から話しかけたら積極的にいろいろな話をしてくれて握手もしてくれた。世界共通語は英語であることを身を持って知ったので，今後は話せるように，理解できるようになりたい。

## 2-2 山岳民族(カレン族)に会ったこと

・テレビでは見たことがあったけど、実際に会ってみて、現実にいることに驚いた。振り返ってみて気づいたが、男性が全くいなかったことが不思議であった。写真を撮るときに首輪をつけてくれたり、アクセサリーを買いたいといったら「これはどう?」と言ってくれたりした。もっと積極的に話しかければよかった。

## 2-3 チェンマイの街の様子

・毎晩ナイトバザールが行われており、夜がとてにぎやかであった。時計や信号をほとんどみかけず、車が人よりも優先されていたり、ポイ捨てが見られなかったりしたことが記憶に残っている。大きなショッピングモールの上の階には店がほとんどなかったり、トイレに入るのにお金が請求されたり、トイレットペーパーが常備されていないことなど、日本では考えられないことがタイでは当たり前で常識が揺さぶられた。

野口佳純

## 3-1 地図購入

・2日目にチェンマイの詳細が書かれている地図を購入するという課題が出されました。日本であればコンビニですぐに入手できる地図ですが、タイではどこに売っているのか、どうやって売り場を聞いたら伝わるかわからないため、地図購入にはとても苦労しました。国が違うだけで、いつも簡単に入手できると思っていた地図がなかなか見つけれなかったことに驚きました。

## 3-2 チェンマイ大学学生との交流

・3日目にチェンマイ大学の学生たちと交流しました。初めてお会いするタイの学生さんがどのくらい日本語を話すことができるのかわからずとても緊張していました。しかし、私が予想していた以上にタイ人の学生は日本語を話すことが上手で、積極的に話しかけてくださり、日本のことを知りたい、学びたい

という姿勢がよく伝わってきました。私はタイの学生の方々が真剣に私たちと向き合い、プレゼンやダンスに参加して下さったことが嬉しかったです。普段の生活の中ではなかなか他国の学生と交流する機会はないため、貴重な時間を過ごすことができました。

### 3-3 雲南ムスリム市場での経験

・4日目の朝、雲南ムスリム市場に行き、2日目に食べたカオソーイとは異なるカオソーイを食べました。同じカオソーイでも全く違う風味を味わうことができました。また、ムスリム市場ではたくさんのフルーツが販売されており、ドラゴンフルーツやドリアン、ランブータンを食べました。食べたことがないものを食べるということはなかなかできる経験ではないので、挑戦できてよかったです。

## 屋間雅貴

### 4-1 チェンマイのナイトバザール

・初めての海外ということもあり、少し緊張していた。初日夜に訪れたナイトバザールの雰囲気、それに町のバイクや車の数の多さに驚いた。

### 4-2 チェンマイ大学訪問

・チェンマイ大学で日本語を学んでいる学生が、とても日本語が上手であった。世界でもかなり難しい言語とされる日本語の読み書きはもちろんのこと、漢字まで書けるのはすごいと思った。日本のファッションや文化を知っている学生が多かったため、色々な話をすることができた。

### 4-3 旧市街探索

・寺院に訪れた際、龍や象などの動物の彫刻が記憶に残っている。寺院の建物の素材が木のものと金のものがあり、その相違について自分なりに調べてみたいと思った。

樋口晴香

### 5-1 チェンマイ大学での思い出

・プレゼンに自分が思っている以上のプレッシャーがかかり、自分をコントロールできなかったのですが、前日にふっきれたことにより、まとまった分かりやすいプレゼンができました。そのおかげで、チェンマイ大学の学生たちが私の話に乗りやすい状態になったのだと思いました。また、チェンマイ大学の学生は日本語が上手で、こちらの問いかけにリアクションしてくれるので、プレゼンをしていて楽しく感じることができました。

### 5-2 カレン族村落を訪問したこと

・博物館に訪れて、タイにさまざまな民族がいることに驚きました。また、村落を訪問する前は勝手な山地民像を抱いていましたが、実際に訪れてみて印象が変わりました。先生から意図的につくられた観光村落であることを教えてもらい、人数がイメージしていたよりも少ないことに納得しました。もっと深く山地民のことを考えるべきだと思いました。山地民は、観光客や研究者の興味や研究の対象になっているけれども、彼ら自身はどんな気持ちを持っているのだろうと考えました。

### 5-3 タイ式マッサージ

・ナイトバザールのあとに行った足マッサージでは、閉店間近にもかかわらず嫌な顔せずに入受入れてくれて、お話もたくさんしてくれた。女子のみんなで英語やタイ語を一生懸命使って話が出来たことに、自分の言葉で伝えられるという自信になりました。他のスタディツアー参加者の伝え方をみて学ぶことがたくさんありました。またチップ文化について学べたことも良かったです。

### 設問2

タイ滞在時、誰（スタディツアー中に会った人びと、スタディツアー参加メンバー、自分を含む）について、どんな新しい発見がありましたか？

中川翔太

- ・山岳民族にも数多くの種類があり、服装や歴史の違いを学ぶことができた。
- ・チェンマイ大学では「ピーポー」という学生を中心に授業外の学生とも交流し、なかには日本から来ている留学生もおり、楽しそうな生活を送っていた。

鈴木友香

- ・言葉の壁は意外とないことに気がついた。表情やジェスチャーを使えば結構思いは伝わりと感じた。理解が難しかったとき、相手が英語や日本語を使ってくれたことが嬉しかった。人を思いやる気持ちはどこの国の人も持っていることがわかった。
- ・チェンマイ大学の学生たちは日本が好きだ。日本人と友達になりたいと言ってくれて、日本を知ろうとしてくれて、友達になるのに時間はかからなかった。

野口佳純

- ・山岳民族の村を訪問した際、カレンの女性が首に何重もの金色のリングをつけており驚いた。私は首にだけつけるものとばかり思っていたが、実際には両足の膝にもつけていた。私たち日本人にはそのような風習はないけれども、彼女らにとっては当たり前のことで、同じ地球に住んでいるのに歴史や国境、地域が異なるだけで、生活習慣や文化までもが変わってしまうことを実感しました。

昼間雅貴

- ・チェンマイ大学でのプレゼンにあたり、樋口さんが事前練習よりも本番の方が上手にまとめられていた。緊張している様子はなく、堂々と発表しているようにみえた。発表の時、チェンマイ大学の学生は一生懸命にノートにメモを書いていた。

樋口晴香

- ・山岳民族の方たちの日常生活のなかに観光客として立ち入ることができるこ

とに驚いた。

・最初タイ人は冷たい印象があったけれども、私たちが困っているとき、お願いをしているときなど、わかりやすく丁寧に対応してくれたので、冷たいわけではないことが分かった。出店で服を買い、店員と少し話をした時に、ドラえもんが好きな女の子がキャラクターの名前を嬉しそうに話している姿をみて嬉しくなった。知っている言葉を並べているだけなのに、ジェスチャーで伝えることができるのだと知り、もっと話をしたいと思うようになりました。

### 設問3

タイ滞在時よりバージョンアップしている今後の自分のために、あなたは何をしたいと思いますか？また、それをするためには、今後どういう行動をとる必要があると考えますか？具体的に書いてください。

中川翔太

・もっと様々な世界を知りたいと思いました。これまでは自分が見える範囲を把握していれば十分だと思っていました。しかし、タイで初めて日本の外の世界を経験し、もっと未知の世界を肌で実感していきたくなりました。

鈴木友香

・今回のスタディツアーに参加して、改めて自分は人と関わるのが好きだと感じた。言葉が分からなくても、表情やジェスチャーでコミュニケーションをとることが出来て楽しかった。今後も年齢、性別、国など関係なくたくさんの人と関わる人生を送りたい。言葉の壁はあまり感じなかったが、相手の言いたいことを理解できることにこしたことはないので、まずは英語を使えるようになりたいと強く感じた。そして、タイで出会った人たちはとても優しくしてくれました。それを感じて、私も仲のいい人、初対面の人関係なく、手助けしたり、親切に出来る人間になりたいと思った。また、少しでも疑問に思ったことや、興味を持ったことを深く追求するくせをつけたい。そのために視野を広く持ち

たいので、道を歩くときでも周囲を意識して生きたい。

#### 野口佳純

・私がこのスタディツアーを通して一番驚いたことは、チェンマイ大学で出会った学生たちの積極的に学ぼうとする姿勢です。日本では大学は就職するために進学すべきものとなっており、心の底から学びたくて進学したいという人は少ないように感じます。しかし、チェンマイ大学の学生は真剣に日本について、語学の勉強がしたいという強い意志を持って進学し、学んでいることが伝わってきました。また、インターネットが普及し、様々な情報を手に入れることができるようになったけれど、普段は新しいものに触れ合ったり感じたりする機会がなかなかないため、今回タイに行って実際にお話を聞いたり交流したりすることでしか知ることができないこともたくさんあるということが分かりました。私は普段の生活の中で新しいことを始めたり、挑戦したりすることがないため、スタディツアーを通して学んだことを活かして行動していきたいです。実際に自分の目で見て、触れて感じる事が一番大切であると思いました。

#### 屋間雅貴

・私は対人関係をより一層深めていきたいと思っている。また、より一層対人関係を深めるために、相手の意見などをしっかりと聞くようにしていきたいと思った。海外の人たちともコミュニケーションをとっていきたいと思っているため、英語以外の言語も身につけたいと思っている。タイ語も少しずつでも話せるようになりたい。

#### 樋口晴香

・言葉が通じなくても、読めなくても、コミュニケーションはとれるけど、やはり言葉は分かったほうがもっと楽しいだろうと感じた。主に英語はどの観光地でも使えるので、より深く勉強したい。だがそれよりも、今回訪れたタイの歴史や自分が疑問に思ったことでいまだ答えがでないことの解決をしたいで

す。そのためには情報を集め、知識を肥やす必要があると思います。また、自分の思ったことや感じたことを言葉にしたいです。なぜなら、私は文章化するのが苦手で、頭の中のイメージを人に伝えるのが難しいと感じるので、いつも「あれ」や「それ」で伝わるものを、その風景を知らない人たちに伝えられるよう練習したいと思います。その場にいなかった人に写真を見せても、イメージを伝えるのは難しいですが、シンプルにわかりやすくを目標に頑張りたいです。他の国にも行ってみたいくなりました。

\*\*\*\*\*

以上、三つの設問のみを取り上げ、それらに対するスタディツアー参加学生による回答を紹介した。これらの他にも、いくつかの設問を用意し、興味深い回答が多くみられた。たとえば、「タイにおいて、新しく学んだことは何ですか？もっと知りたいことは何ですか？」という設問に対しては、「日本の常識が必ずしも世界の常識ではないことに気づいた」という意見が目立った。それは街並みや屋台に並ぶ果物の種類の相違といった表層的な（外見上の）認識だけを意味しない。各敷地に必ず設けられている土地神の祠に対するお供え物や仏教的信仰心の違いといった、文化的な違いに気づくコメントも少なからず見られた。その一方で、住む環境や話す言葉の違いがあれども、人間として助け合って生きているという普遍的な価値観にも学生たちは気づいたようである。本スタディツアーが一つのきっかけとなり、彼らが視野を広げて学外でも積極的に活動してくれることを切に願っている。

#### ◆引率教員◆

鈴木佑記（政治行政学科教員）・加藤将貴（経済学科教員）

#### ◇参加学生◇

中川翔太（経済学科4年生）・昼間雅貴（経済学科4年生）・鈴木友香（経済学科4年生）・野口佳純（経済学科4年生）・樋口晴香（政治行政学科3年生）